

# 筆山

第43号 / 2007年12月

## 土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報

編集人/西岡 恒憲 (41回)

編集室：〒106-0032 港区六本木3-16-12-7F 六本木司法書士合同事務所気付 編集委員 鶴和千秋 (41回)

TEL 03-3587-6200 FAX 03-3587-6201 E-mail:tsuruwa@rsg.gr.jp

関東支部ホームページ：http://www.tosako-kanto.org/



パラッツォ・ヴェッキオ



ポンテ・ヴェッキオ



ドゥオーモ

## ルネッサンス発祥の地より

永森誠一 (42回生)

中学校の二年生のときだったか、世界史の教科書に「文芸復興」とあり、ルネッサンスと仮名がふつてあったような気がする。いくつかの偶然が重なって、そのルネッサンス発祥の町フィレンツェで、長くもあり短くもある一年半を過ごすことになり、いま二年目に入ったところ、もう死語に近い「文芸復興」という言葉を丸暗記したときには、無論こういうことになるうとは思ってもいなかった。

この町は、ほぼ五百年、絶え間ない改築と修復を重ねて現在に至っている。雨風による痛みもあるから、いつもどこかで修復工事中で、作業用足場のないフィレンツェを見る機会はないだろう。もつと古いフィレンツェの名残もある。ドゥオーモからアルノ川にかけての街路は、ローマ帝政期のそれを引き継いでいる。いまも県庁としてつかわれているパラッツォ・ヴェッキオの下には、ローマの円形劇場跡が埋まっているし、ポンテ・ヴェッキオも、その時代から幾度か架け替えられて現在の姿になったらしい。

こういう町に住んでいると、時間は過ぎ去るというより降り積もる。そういう実感というか、体感がある。目には見えないが、天井から絶え間なく舞い落ちる埃が、すぐに床に積もる。靴を脱ぐ和風の暮らしを続けているので、毎日のように掃除しなければならぬ。「ルネッサンスの埃やなあ」と思ったりする。

しかし、ほかの町と同様、この町も排気ガスやスモッグに悩まされていて、路面電車の復活が検討されている。ドゥオーモの脇を通す計画で、実現されたとしても、それが景観に馴染むのには時間がかかるだろう。その間にも埃は降り積もり、修復は続く。人は歳をとるだけだが、町はまたルネッサンスを迎えることがあるかもしれない。

## 関東支部活動報告

事務局長 二宮 潔(49回生)

今年はどこもかしこも地球が悲鳴を上げているかのような記録的炎暑でした。

おまけに世相と言えば、教育再生、コンプライアンス、地球環境、エネルギー資源、国際貢献、国益外交・・・と

課題山積にも拘らず、明確なビジョンと戦略が示されず道筋が見えない。相変わらずの三流政治と腐敗した官僚組織、年金詐欺、凶悪犯罪の増加、北朝鮮産のアサリに中国産の汚染食材、初めて耳にしたダンボールハンバーグ。赤福、お主もか。

『幕末、日本の建て直しを誓った坂本龍馬が姉、乙女宛ての手紙に書いた一節「日本を今一度洗濯いたし申し候」。今こそ相応しい言葉に思える。(産経抄10・24より)』

さて、今年後半の関東支部活動報告ですが、以下2つのトピックスに絞ってご報告します。先ずは猛暑の8月26日、表参道で開催された『原宿表参道元氣祭りスーパードよさこい』(高知からの14チームを含む全国108チームの参加)です。「ガーナ支援会」(古

谷俊夫会長)が発足してはや6年。今年も8・17、9・4までの19日間にわたり、ガーナ高校生を迎えて日本の高校生との国際交流(4回目)に加え、野口英世の故郷福島県を訪問。そして11・3にはガーナの首都アクラ市で「よさこい祭り」(6回目)が開催されました。

前半のビッグイベントとして、ガーナ高校生20名と麻布学園、東洋英和女学院、土佐の現役生徒が主役の総勢100名の「ロッテ・ガーナよさこい連」がスーパードよさこいに参加。今回は関東支部から中村裕子さん(37回生)・金澤由里さん・田口祥子さん(55回生)のハチキン姉妹が

現役組に混じって猛暑のなか、ガーナのリズムに見事乗り切って、友情参加されました。支援会の浅井伴孝・和子ご夫妻(30、35回生)・中田昌志さん・公文敏雄さん・中村明裕さん(35回生)らの民族衣装を纏った応援組に混じって、団扇片手に橋田正幸ご夫妻(37回生)・岡田四郎さん(38回生)ら私たち後方支援組も、正午の表参道から夕方の代々木公園口まで楽しく応援見物しました。支援会からの案内状を関東支部HPにも

掲載し応援を呼びかけ、多数の同窓生が応援に駆けつけました。

今回の「ロッテ・ガーナよさこい連」は、よさこい風にアレンジされたガーナ独特のリズムカルな曲と、踊り子の皆さんの大変熱のこもった上手な踊りっぷり、そして田口祥子さん(前述)のデザインによる衣装の素晴らしさにも

応援の同窓生は堪能しました。ついでに代々木公園でやりよつた高知物産展で嶺北のミョウガや生姜、鮮やかな赤・黄のパプリカを半値半額で買うもたら、家内(51回生)に「そんなにどっさりどうするの!？」と叱られました。

次に大変喜ばしい話題を一つご紹介します。既に8月下旬の新聞発紙・地元テレビニュースで報道され、関東支部HPにも掲載されましたが、2年前の9月に「慢性活動性EBウイルス感染症」に襲われ、壮絶な闘病生活を余儀なくされて一時は生死の境をさまよった戸田浩司君(高知大教育学部3年・80回生)が、弟さんからの造血幹細胞移植とその後の激しい免疫拒絶反応を見事に克服。昨年6月に退院、同10月には復学を果たし、このほど四国六大学野球秋季リーグの徳島大戦に公式戦初登板

ストッパーとして2回を無安打に抑え勝利に貢献しました。試合当日は、戸田君のご家族はもとより支援関係者、報道陣も多数応援や取材に駆けつけ、戸田君が病院のベッドで「夢にまで見たマウンド」での最高のデビューを祝いました。



2年前の今頃、池上校長、坂本隆教諭ほか教職員・在校生・振興会・同窓会関係者が一致団結した「戸田君支援活動」とその後の「骨髄バンク8万人登録運動」への継続展開。戸田君が命を賭けて仲間を動かし、高知から全国に向けて発信されたドナー登録運動。12月29日には「同運動の2周年記念行事」を地元のRKCホールで開催予定、「帯屋町行進」も行われるそうです。目標であったドナー登録30万人の達成は、もう間もなくです。(既に9月末時点で29万人を突破。)

## 母校だより

学校長 池上武雄(28回生)

関東支部の皆様には、お変わりなく、清勝のこととお慶び申しあげます。いつも母校に對し熱い思いと、支援を賜っており、誠に有難く厚く御礼申しあげます。

○新校舎建築工事が始まりました

9月26日の吉日を選んで起工式が旧グラウンドで執り行われ、宮地理事長ほか参加者一同心より工事の無事安全を祈願いたしました。

10月27日現在、旧グラウンドには高々とタワークレーンが組立てられたほか、三基の杭打機が林立して、建築予定底地に様々な杭打ち工事が行われています。工事現場の回りは全て仮囲いがなされ、所々に透明の板を挟んで現場を覗ける工夫がされております。

また外壁には、現在行われている工事の工程、作業手順等が図解されており、生徒達だけでなく先生方も休み時間には熱心に眺めている姿が見られます。高校生にとっては各教室からこれからの建設工程が逐一見られる訳ですから建設関係に進みたいと考える生

徒が増えるかも知れませんが、工事中の騒音は、モーター音が続いており、その音の今とどこか思った程の高音の連続はないように感じます。試験中は特に気を使うところですが、英語のリスニング試験の時は一切の工事をストップしていただくような配慮もお願いしております。

この外工事開始にともない体育の授業が旧グラウンドでできない為、新グラウンドへの往復移動をバス二台で行うこととしました。休み時間10分の間に安全輸送を工事期間中実施いたします。勿論旧グラウンドで行われていたクラブ活動(ソフトボールやハンドボール等)も全て新グラウンドへ移行しました。

○新校舎建築募金活動も順調です  
本校ホームページでもご報告いたしておりますように同窓生の皆様だけにとどまらず一般の方々からも温かい協力を賜っておりますこと心から感謝申し上げます。9月30日現在の募金総額は、1,219件、110,841,351円です。ご芳志有難うございます。なお今後ともよろしく願います。

○秋は文化行事が盛沢山です  
11月3日には第15回オーケストラ定期演奏会が、「かるぼー」と大ホール」で行われます。

吹奏楽部は多くの学校で活躍しておりますが、オーケストラ部の活動は少なく、松尾功祿先生、松本牧夫先生のご指導のもと毎年難曲に挑戦して注目を集め好評を得ているところでは。

また、例年開催の文化行事として今年11月13日、青島広志氏ほか3名の歌手による「青島広志のペール・ギュント」と題して楽しい音楽劇を本校講堂で開催しております。オペラやおしゃべりなど楽しい企画で大いに盛り上がるものと期待しております。

○高一修学旅行でお世話様になります  
平成19年度修学旅行は、11月20日から四泊五日の日程で、東京、京都をめぐる予定です。参加人員は、生徒313名、先生13名計326名です。2日目の11月21日は、コース別研修で関東周辺10コースに分かれ文学歴史、政治法律、物理宇宙、生命医療などジャンル別に見学を行います。生徒達はコース別にあらかじめ色々

な基礎知識などを予習して参りますが、この研修の大きな目玉は本校卒業生による現地案内や説明をいただけることです。伝統ある本校ならではの企画だと誇りにいたしております。お世話様になる諸先輩の皆様から感謝申しあげております。どうかよろしくご指導の程お願い申し上げます。

寒さに向かう折から皆様のご健勝、ご活躍を祈念申し上げます。ご活躍を祈念申し上げます。(10月末日)

### 本部だより

集う同袍意気強し

幹事長 安岡範悦(39年生)

現校舎で最後の2007年ホームカミングデーは500人を超す若者男女の参加のもと盛会裏に終わりました。ホームカミングデー方式での同窓会総会としては第1回目である2004年ホームカミングデーは「門をくぐれば懐かしの我が母校」、2005年ホームカミングデーは「ここから始まった自分に帰ろう」、2006年ホームカミングデーは「門をくぐれば



と遠慮される先生に「昔のままの授業をお願いしたいのです、授業がダメなら試験でも構いません」と言ってお願ひしたこと。どの教室も満員で胸をなでおろしたあの時のことなどが脳裏をよぎります。2008年総会は校舎改築中であり、ホテルでの開催となりますが2009年は新校舎でのホームカミングデーとなります、是非ご参集頂きたいと思ひます。

同窓会各支部総会、ホームカミングデーで、各界、各層で活躍する多くの同窓生にお会いする度に、卒業生で「ようこそ先輩士佐校版授業」が出来ないか、現役士佐校生を対象とするだけでなく、希望

あの頃の自分に会える」、2007年ホームカミングデーは「輝いたあの頃に帰ろう」のキャッチフレーズを掲げ、恩師による記念授業、特別講座、プラスバンド部・OBとのコンサート、懐かしい食堂の味、懇親会、オリジナルグッズの販売等々企画・立案・実施してきました。これらは西山彰一実行委員長(48回)を中心とした実行委員会スタッフの協力の賜物です。「何十年も教壇に立っていない、今様の授業は出来ん」



があれば県内の学校で、あるいは故郷高知の為に、卒業生の経験や英知を提供出来ないか、本部事務局は自薦・他薦の人材事務局を兼務してはどうか・・・ふと考える今日この頃です。

### 北海道支部だより

幹事長 和田健夫(44回生)

関東支部の皆様こんにちは。誕生したばかりの北海道支部からご挨拶申し上げます。北海道支部は、窪田秀忠氏(38回生)のご尽力と関係各位のご協力により、会員50余名で昨年6月11日に第6番目の支部として発足いたしました。

その窪田氏が今年の5月、富士メガネ社長を退職し高知に戻られることになったため、役員改選を行い、支部長、幹事長、事務局長に、それぞれ池川昌弘氏(39回生)、私、島村昭範氏(49回生)が選ばれました。現在の名簿によりますと、最年長会員は濱田武夫氏(23回生)、最年少会員には今年新たに日野雄介氏(81回生、北海道大学理学部)が加わりました。前支部長の田原哲士氏(37回生)は、今

年の4月北海道大学農学部を定年退職され、退職後も札幌にお住まい(余市に農地を借りて農業をやりながら晴耕雨読の生活)です。

現在札幌で、定期的に(年に2回ほど)幹事会を開いています。話題は当然母校に及び、話がはずむにつれ、封印されていた古い記憶がよみがえり、タイムスリップしたような気分になれます。今年の7月14日に、札幌の「海鮮まるだい亭」で北海道支部総会を開催いたしました。本部、関東支部からも参加いただく予定でしたが、台風の影響で参加できない方が出たことは残念でした。

北海道のことを少し紹介させていただきます。北海道というところ、私が子供のころは、異境でした。北海道に住んで30年になりますが、風景や文化の違いを感じます。今でも北海道を旅行するときは、特別な気持ちになるのではないのでしょうか。某新聞の調査では、最も住みたい都市のベスト・テンに札幌を始め北海道の都市が5つも選ばれました。この原稿を執筆している時点で、道民は、北海道日本ハムファイターズの日本シリー

ズ戦で大いに盛り上がっています。ファイターズは、巧みな広報活動もあつて、完全に北海道に定着しました。高校野球での活躍など、かつての野球後進国で、ジャイアンツファンばかりだった時代と比べると様変わりしました。また、高知のよさこい祭りが移植されて発展した「YOSA KOIソーラン祭り」は、北海道で異常な流行をみせ、夏の一大イベントとなつていま

す。私の住んでいる小樽は、快速電車で、千歳空港駅から約1時間、札幌から約30分のところにあります。北海道有数の観光都市ですが、冬には「小樽雪あかりの路」というイベントがあります。石造りの倉庫群が並ぶ運河周辺や道路に氷で作られた無数のキャンドルが夜の街を照らし、幻想的な風景を醸し出します。札幌冬祭りに匹敵する冬のイベントになりつつあります。一度訪れてみてください。

### 東海支部だより

事務局長 神宮美恵子(44回生)

関東支部の皆様、こんにちは。東海支部からご挨拶申し

上げます。今年はいつまでも「夏」のような気候が続いて、地球温暖化を実感させられましたが、ようやくこここで「秋」を見つけられるようになりました。各地で秋祭りの季節です。

名古屋では10月中旬に「名古屋まつり」が行われます。メインとなるのは郷土英傑行列です。公募で選ばれた織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三英傑が各々濃姫、ねね、千姫や名だたる武将を従えて、名古屋の中心街をパレードします。例年秋晴れの中華華な時代絵巻行列が続き、2日間で100万人を超える人出があります。この地方の近隣には戦国時代の史跡や古戦場も多く、身近に感じられることもあるのでしょうか、楽しみにされている方が多いようです。今年はこちらと同様に、プロ野球セリーグのクライマックスシリーズが名古屋ドームで行われていて、名古屋の街は更にヒートアップしております。

この「名古屋まつり」が行政主導のものであるとすれば、その1週間後に行われる「大須大道町人祭」は庶民の祭り

と言えるでしょうか。大須は大須観音を中心とした古くからの商店街ですが、現在はパソコンショップ、古着屋や最近東京に進出して話題となった「コメ兵」などがあり、古さと新しさが入り混じった、若者に人気の少しマニアックな感じのする町です。祭りでは、全国から大道芸人が集まり、さまざまな大道芸が披露され、華やかなおいらん道中があり、昔懐かしい風物屋台が出て多くの人で賑わいます。

中部地方の有名な祭りといえば、飛騨地方の伝統的な「高山祭」が思い浮かびます。誰が決めるのかはわかりませんが、秩父夜祭・祇園祭と並んで日本三大美祭と言われるそうです。高山祭は春4月の山王祭と秋10月の八幡祭の総称ですが、「動く陽明門」と言われる豪華絢爛な祭屋台は一度実際に目にしたいものです。ただ、人が居なければ祭りにはならないでしょうが、有名になればなるほど人出は多くなり、人ごみは苦手という人にとつてはいつまでも本物は遠い世界ということになりますね。斯く言う私もその口なのですが。

東海支部では今、冬の懇親

会に向けて準備が進められておられます。例年、こじんまりとした集まりですが、和やかで楽しいおしゃべりが続き、あつという間に時間が過ぎていきます。なかなか世代交代ができないのが悩みのタネですが、無理をせず息長く同窓会活動が続けたいと思っております。関東支部の皆様も名古屋においでの際は是非お気軽に声をおかけ下さい。最後に関東支部の皆様のお祈りして支部だよりとさせていただきます。

### 関西支部だより

幹事 中田志保美 (56回生)

昨年より、関西支部のお手伝いをさせていただいております中田です。

この春の幹事会で、ひととおり議事が片付いて幹事の皆さんと雑談してしまいました。宝塚歌劇の話題になりました。宝塚歌劇とは、いわずとすれば、兵庫県宝塚市にある、「ベルばら」ブームで有名な劇団です。実は私、土佐高時代から宝塚が大好きで、卒業後一時は宝塚市にも住んでい

たこともありました。宝塚歌劇というところ、女性ばかりのきらびやかな劇団でファンも女性ばかりということ、男性は拒絶反応をされる方が多いかもしれません。でも、ここ関西では地元だけあって、けっこう男性にも宝塚に対する「免疫」ができています。お姉さんやお母さんに連れられて子供の頃観劇したとか、学校の校外学習で行ったという男性も少なくありません。

幹事会のメンバーの中にも、私と同じくらい熱心なツカファンがいます。Kさんは最近奥さんと二人で宙組公演を初観劇されたとか。さらになんと、自己所有のマンションの部屋を、花組人気男役タカラジェンヌに貸しているというマダムYさん(かなりうらやましい)。一度関西支部で観劇会をやりましょうという案も出ています。宝塚はこちらでは身近な存在なのです。

宝塚の舞台を見たことのない方、特に男性は食わず嫌いの方が多いと思います。だまされたと思って一度観劇してみてください。美しいだけでなく、現実を忘れて、感動

と夢とエネルギーを与えてくれます。わざわざ関西まで見に行かない? いいえ、大丈夫です。関東支部の皆さん、有楽町に東京宝塚劇場があります。帝国ホテルの近くですね。宝塚大劇場で公演したものはすべて、二ヶ月後には東京宝塚劇場で見ることができます。2007年は、坂本龍馬が主人公の「維新回天・竜馬伝!」、江戸川乱歩「黒蜥蜴」、ウィー

ンのヒットミュージカル「エリザベート」など、なじみのある演目がたくさん上演されました。2008年も話題作が目白押しですから、おすすめめです。

何か劇団の回し者のような口調になってしまいました。とにかく「百聞は一見に如かず」。宝塚が女性の皆さんにとっては心の美容液、男性の皆さんにとっては心のオアシスになってくれることを祈ります。

### 広島支部だより

東京雑感

支部長 沖 修一 (40回生)

関東支部の皆様こんにちは。

私は広島在住ですが、所用がありよく東京へ出かけます。この10月はじめにも品川で所用があり二泊三日で行ってきました。日中の仕事が終わりに、夕刻同僚11人でJR品川駅前に食事に出かけました。きちんとした焼き鳥の店(レストランというよりは店と呼ん

だ方が焼き鳥には相応しいように感じられました)に行ったら、きのことでした。入店後席に着くと若い女性が注文を取りに来ましたが、言葉がおぼつかない様子でした。容姿は日本人そのものでしたが、日本人ではないのでしょうか。従業員の女性同士がしゃべるのを聞いていますと、語尾を少し伸ばすように発音する広島語ではないように感じられました。なので、北京語かもしれないと想像しました。台湾からの出稼ぎでしょうか?翌日の夕食はインターネットで調べ、浜松町まで出かけて、創作日本料理の店に行きました。和服を着た若い女性が応対してくれましたが、やはり言葉が生まれつき日本語を喋る日本人とは異なっていました。姿形、立ち居、振る舞は日本人と全く区別が付きませんでした。やはり外国からの出稼ぎ

なのでしよう。観光客とは異なり、日本で仕事をし、稼いでいる外国人が非常に増えたことを実感しました。人件費を含む物価が世界で最も高騰している国の一つである日本において、日本人経営者から見れば、低賃金の外国人労働者を雇用することは大きなメリットでしょう。しかし、法的には外国人が第三次産業で就労することはどのようなようになってい

るのでしょうか。また、かれらはどのようにして来日し、どのような場所暮らししているのでしょうか。教育の程度はどうなっているのでしょうか。このままどんどん増えて、かれらなるのコミュニティを形成するようになるのでしょうか。かれらが増え続けると、日本人の就労機会が減るので、低賃金というだけで、外国人を雇用する日本人のモラルは問われることはないのでしょうか。外国人労働者は移民とは異なりますが、外国人労働者が多くなり、彼らなるのコミュニティを形成した時に、ドイツやフランスのように人種問題(移民問題)が日本でも起こらないでしょうか。

いつもアルコールと一緒にする話は、旅行などたわいもない話題しかしらないのですが、今回は2回続けて外見は日本人と変わらない外国人が仕事をしている現場に出会ったことから、話題が盛り上がりました。

私も多くはありませんが、外国人の友人・知人がいます。私の周りの外国人は、全て日本国政府からVISA(査証)の出入り人達です。彼らは洋の東西を問わず、母国ではある種のエリート達で、いずれ帰国し、母国で活躍する人たちです。このような外国人と一緒に仕事をすると、相手の国の歴史・文化への理解が深まると同時に、自分の教養も高まるように思われます。学問・知識・科学・技術などには国境、人種がなく、普遍的であることを実感させられます。土佐高卒業生にも外国で仕事をし、生活している人、あるいはその経験のある人は多いと思います。仕事先の国の人たちから、ただ単に日本人が来て仕事をしている、と思われるだけでなく、土佐高卒業生であれば仕事を通じて国境や人種を越えたある種の価値観のようなものを伝えるこ

とができると信じています。東京に行く、いつも何か新しい印象です。今回も仕事とは別の意味で有意義な東京でした。関東支部の方々もぜひ広島にお越しください。瀬戸内の温和な気候に恵まれた土地で、新しい発見があると思います。平成20年の広島支部総会は11月8日(土)に行う予定です。関東支部の方々一人でも多く晩秋の安芸路を楽しまれることを切に望んでいます。

### 香川支部だより

事務局長 大石 浩(54回生)  
関東支部のみなさん、こんにちは。香川支部の大石と申します。

香川支部総会は「七夕総会」と称して毎年7月の第一土曜日に開催していますが、今年はその名のとおり7月7日(土)七夕当夜の開催となりました。当日は、母校から三浦教頭先生をはじめ、同窓会本部・各支部から7名の皆さまにご出席いただき、関東支部からは山中和正副幹事長が遠路ご参加下さいました。ご多忙の中、本当にありがとうございました。

今年の総会は、例年どおり三澤衡一郎大先輩(19回)を筆頭に、社会人になったばかりの76回生まで、46名の仲間が集まりました。60回生以下の若手組も10名ほど参加、いつもながら先輩・後輩入り乱れての盛り上がりとなりました。また女性陣では、今回初参加の土居美津子さん(60回 古文の土居先生の娘さん)と、毎年受付を手伝ってもらっている大石晶子さん(62回



2007年11月10日(土) 広島支部総会・懇親会が開催されました

旧姓岡林さん)の2名が参加。二人は、土佐高在学中は、バスケットボール部の先輩・後輩で、久しぶりの再会となったようです。お天気の方はあいにくの曇り空で、会場のある高松シンボルタワーから瀬戸内の素晴らしい夕景を堪能いただけるとは至りませんでした。したが、結局のところ、乾杯をしまえば外の景色などそつちのけです。諸先生方の思い出話、母校の建替にちなんで昔の校舎やグラウンドのこと、野球部をはじめクラブ活動のことなど、懐かしい昔話で大賑わいでした。

今回の役員改選では、昨年12月ご病气により逝去された中澤正良幹事長(38回 ドコモ四国社長)に代り、安岡



弘道幹事(41回 株式会社サカコー)が新幹事長に就任されました。その他にも、谷脇守氏(48回 高知新聞社)、上池裕氏(50回 J.R.四国)、清岡豊彦氏(63回 四国銀行)が幹事に、中嶋康士氏(64回 四国銀行)が事務局に新しく加わってくださいました。今後とも、新体制をよろしく願います。来年の香川支部総会は7月5日(土)を予定しています。ご都合の許す方は、是非とも高松駅前のシンボルタワーにお送りください。最後に、関東支部の皆さまのますますのご活躍・ご健勝をお祈りいたします。

# 土佐中・高等学校 宮地貫一 新理事長にインタビュー

市川直介 (53 回生)

## 土佐中・高等学校

### 歴代校長 (敬称略)

- 初代 三根円次郎 (大正9年1月～昭和10年3月)
- 2代 青木勘 (昭和10年12月～昭和20年3月)
- 3代 大嶋光次 (昭和20年4月～昭和33年4月)
- 4代 曾我部清澄 (昭和33年10月～昭和56年3月)
- 5代 松浦勲 (昭和56年4月～平成3年3月)
- 6代 森田幸雄 (平成3年4月～平成15年3月)
- 7代 池上武雄 (平成15年4月～)

### 歴代理事長 (敬称略)

- 初代 阿部亀彦 (大正9年2月～大正11年11月)
- 2代 北川信従 (大正12年2月～大正13年4月)
- 3代 宇田友四郎 (大正13年6月～昭和13年10月)
- 4代 川島正件 (昭和13年10月～昭和23年3月)
- 5代 川崎幾三郎 (四代) (昭和23年3月～昭和27年1月)
- 6代 宇田耕一 (昭和27年1月～昭和32年4月)
- 7代 川崎幾三郎 (四代) (昭和32年4月～昭和50年4月)
- 8代 宇田耕也 (昭和50年4月～平成17年4月)
- 9代 川崎幾三郎 (四代) (平成17年4月～平成19年9月)
- 10代 宮地貫一 (平成19年9月～)

宮地貫一氏 (21回生) は、平成19年9月6日の理事会において、土佐中・高等学校の第10代の理事長に就任されました。平成15年に泉谷良彦現支部長にバトンタッチするまで15年余の長い期間、同窓会関東支部の支部長をされており、関東支部の今日を物心両面で築いて来られ、また現在は土佐中・高等学校同窓会会長もされています。同窓生としては、協力一致して母校そして宮地新理事長を支え、盛り上げていく必要があると思っています。

さて、10月11日に開かれた筆山会の昼食会の前に、新理事長にインタビューをしました。



「理事長になられたの抱負を伺います」  
 私が愛する土佐中・高等学校のために、少しでもお役に立つならばと思います。お引き受けをいたしました。土佐中・土佐高等学校の更なる発展のために全力を尽くす決意を新たにいたしました。9月19日には、池上校長とともに本校創立者の川崎家、宇田家、両家の墓前に報告をする。翌20日以降は高知県の各方面でお世話になる方々にもご挨拶に廻ります。

「理事長になられて取り組む課題は」  
 当面の最大の課題は、新校舎建築の大プロジェクトを成功させることです。土佐高80周年記念行事が行われた後、100周年を睨んで土佐高のあり方を検討する100年委員会が発足しました。委員会では、学校経営や学校教育等広く議論され、21世紀の社会の中で活躍する人材を養成するに相応しい環境をハードとソフトの両面で提供したい、

「最後に関東支部の同窓生に」  
 同窓生の皆様方の熱い力添え、ご支援をお願いし、理事長就任のご挨拶とさせていただきます。

「理事長に就任された経緯をお聞かせ下さい」  
 新生「土佐」の誕生に向けてご尽力くださいました川崎幾三郎前理事長が、平成19年9月6日の理事会において、ご自身の体調のこともあり、退任のご意向を示されました。また、その席で、私に理事長に就任して欲しいとのご推挙があり、理事会のご賛同も受けまして理事長の職を引き継ぐことになりました。その使命と責任の重さに身が引き締

# 関東支部

# 学生・若手社会人同窓会

小松 岳志 (70回生)



## 再出発した 「若手同窓会」

英語で、同窓会はreunion (リユニオン)という。union という言葉は、御存知の方も多と思うが、「連帯」という意味である。それに「再び」という意味のものがつくことによつて、「再び連帯する」、「再び繋がる」という意味に

なり、転じて「同窓会」の意味に用いられる。

私は、このreunionという言葉の響きと、その中身が好きだ。私は、2004年7月から2006年4月までの約2年弱の間のアメリカ留学中から帰国後にかけて、何度か米国流のreunionに触れる機会があった。もちろん、懐かしい顔を見て再会を喜び合うということは、洋の東西を問わず同じであるが、同時に、その場で老若男女を問わず積極的に交流している姿に感銘を受けた。

私は土佐の同窓会も好きである。土佐校生独特の社交性・物怖じのなさが、私が見た米国流のreunionと同じような雰囲気を感じ出しているように感じられる。

同じ学校を出たというだけで、卒業した年も違えば、一度も会ったことさえない人々

が集っているのに、なぜか思い出や価値観を共有し、そこから生まれてくる信頼関係をベースに何か新しいことを試みていくということは、かけがえもなく素晴らしいことだと思ふ。

前置きが長くなったが、自分自身のそんな思いと、先輩方の心強い後押しがあったことから、去る11月17日(土)の夕刻に、以前2001年から2003年まで3回にわたって行った若手の同窓生同士の集まりを「学生・若手社会人同窓会」という形で衣替えして、再開した。

今回は、「もつと、若い人が来やすくそして持続できる会になること」をモットーに、場所を東大駒場キャンパスの生協食堂として、学生2000円、社会人3000円の参加費で開催した。幸い、社会

人約25名、学生約30名という丁度よいバランスで参加者が集まった。

会場では、社会人から学生に対する声掛けも素晴らしく、また、学生から「こんな人と話したい!」というリクエストもたくさん頂き、橋渡しもさせて頂いた。

会の終了後は、その場でアンケートを実施してもらい、結果は総じて好評であったが、学生からは「もつといろいろな業界の方にたくさん参加してもらいたい」との意見が多く寄せられていた。

この会の大きな目的の一つは、就職などの人生における大事な決断を控えた学生の方々に、土佐の先輩たちの経験やネットワークを提供したいということにある。学生たちの希望に少しでも応えていくために、次回以降、社会人同窓生の一層の参加を是非とも願いたい。

最後となったが、76回高村麻裕子さん、77回岡崎史晃さん、81回入江明賢さんをはじめお手伝いいただいた方々、また様々な形で御支援いただいた方々に厚く御礼申し上げます。



# ふるさとへの手紙(十)

加藤文典 (76回生)

今回の「ふるさとへの手紙」の話は、高校時代の友人からいただきました。この執筆にあたり大学時代から現在まで約6年間過ごした東京での生活と高知県での生活をあらためて比較し、自分の将来についてゆつくりと考えることができました。私にこういった機会を与えてくれた友人にも感謝しています。

私は高校を卒業して東京の大学に進学しました。特別何かをやるうと思って入学したわけではなかったのですが、「大学時代にもっと勉強しておけばよかった」と後悔だけはするまいと、大学に通う側ら税理士資格の専門学校にも通いました。叔父が地元で税理士をやっていることも税理士資格取得のきっかけであったと思います。現在はその時に取得した資格を活かした仕事をしており、大学時代の苦労が実を結んだと実感しています。

地方での生活の違いを充分に感じることができました。それは生活の中における「仕事」に対しての考え方の違いとその違いによる仕事とプライベートのバランスではないかと思えます。もちろん年齢や職業などにより個人差はあるはずですが、一般的には都会での生活の方が地方での生活に比べ、「仕事」中心であるような気がします。確かに、都会での仕事は都会でしかできない魅力的なものであることは事実です。人生のすべてを仕事に捧げて足りないようなやりがいのある仕事もあると思います。平日はどのような仕事を一生懸命やり、ある程度の給料をもらい、週末はたくさんのもので溢れかえった街で少し贅沢をする。それが都会での充実した生活なのかもしれません。実際に東京でそのような環境に身を置いてみて、将来的に自分がこのような生活を理想としていないことがわかりました。地方の仕事をプライベートのバランスがとれた人間らしい生活の方により魅力を感じます。

そして、高校からの友人や地方出身の友人たちの話を聞いてみると、「若いうちはやりがいのある仕事を、多少無理をしても精一杯東京でやりたい。しかしやはり満員電車にゆられ、仕事に追われるような日常はある程度の年齢までにして、ゆくゆくは地元へ帰ってバランスのとれたゆとりのある生活をしたい。」と



いう考えを持っている人が意外と多くいることに驚きました。都会での生活を経験しているからこそ都会の良さを実感することができ、また逆に地方の良さもわかるものです。そういった意味では、若いうちに都会で忙しい毎日を経験することは自分の将来のために重要な期間であると思えます。しかし、ゆくゆくは地方で

という考え方をもちた人たちが全員が、ある程度の年齢になり、田舎でバランスのとれたセカンドライフをおくれるかというところ、そういうわけにはいかないのが現実です。地方での生活を望んでいる人たちの一番の不安材料はやはり仕事ではないでしょうか。ある程度の年齢になれば家族を持ち、その家族を養う義務があります。家族を持つ人たちだけなく、多くの人にとつて地方に働き口がないとなると帰るうにも帰ることができません。そのような経済的な理由で都会に暮らし続けている人も少なくないのではないのでしょうか。

この問題を解決するために、地方に働き口を設けるしかないと思います。単純なことですが、地方の経済力など現状を考えると簡単ではありません。たくさんさんの企業があり、大量の雇用があるという都会のような状況は地方では困難です。しかし、地方には都会にはないすばらしい自然環境や歴史・文化があります。そういった地方ならではの

のもっと有効に利用できれば、地方経済の発展につながると思えますし、また、地方特有の社会問題である高齢化社会も雇用創出につながると思えます。地方に働き口が整えられ、若い力のUターンが促進されれば、活気ある地方に生まれ変われるはずですが、経済力がつけば、より住みやすい場所になるはずですし、若者が増えることで高齢社会の問題を緩和することにもつながるかもしれません。このような地方改革は個人のレベルでできるのではなく、行政主導の下、地方全体をあげて行う必要があると思えます。

都会には都会の良さが、また地方には地方の良さがあり、どちらを選ぶかは個人の判断です。しかし、現在は選択の余地もなく、働き口のある都会でやむを得ず暮らしている人があまりに多いのではないのでしょうか。一極集中というバランスの崩れはやがてもっと多くの問題を生むと思います。「自分たちの生まれ育った地元にもう一度活力を。そして、バランスのとれた日本に。」東京での忙しい生活は私にその必要性を強く感じさせるものです。

# 第十一回土佐高ハイクの会

# 奥飛驒路ハイクで俳句

前田

勝洋(38回ま)

数えて十一回目となる土佐高ハイクの会、今年はお飛驒・西穂高方面を目指すこととなり、九月十五日、秋の連休真っ只中に新宿工学院大学前を七時三〇分、総勢三十名にて出発、中央自動車道を一路長野に向けてバスが走り出した。

高田谷幹事長(38回)以下、

幹事の面々の三度にわたる入念な下見に全幅の信頼を寄せられているものの、心配されたのは「天候」「渋滞」「ハイクの会で俳句に挑戦する」の三つであった。

さて、走り出して二時間、予想通りの大渋滞でまだ八王子のインターに着かず、バスはのんびりと大名行列のごとく殆ど景色が変わらない。

そうこうするうち、幹事から明日の天候が心配なので、新穂高・乗鞍の順の行程を変更し、今日乗鞍に登り、新穂高は明日にするとの説明があった。

みな提案に異議はないものの、ひとえに雨を降らせないために参加した(?)三八会のマドンナ永野女史から、

西穂高

「私の念力で晴れさせてみせるから」との力強い発言があり、「頑張ってね」という37回生の奥様方の声援があった。

晴れ女としては広島から駆けつけてくれた三八会のもう一人のマドンナ伊藤真紀子さんも居り、二人の力でなんとか天気を持ってくれればと願いつつの旅路となった。心配された渋滞は八王子を抜けるとスムーズで諏訪のイ

ンターに十二時前に着き、安曇野乗鞍高原宮の原の蕎麦処「御池」を借り切りの昼食、永野さん(34回)のお手配によるイワナのてんぷらに、「蕎麦もうまいがこのイワナはまっとうまいいね」と感嘆の声しきりであった。



御池昼食岩魚のてんぷら

た」という満足感の溢れるものとなっていった(この、僅か40メートルが登れず、グツグツタリしていた人が一人、そう幹事長の高田谷君であった)。

宴会は弁舌巧みな副幹事長中島君、三宅君、高知から参加の北海道支部幹事長窪田君等の38回生メンバーで大いに盛り上がったが、37回生の奥様方の淑女振りに比べたら比較的(?)大人しいものであった。

その鬱憤を晴らすべくか、

午後三時過ぎ、目的の乗鞍畳平に到着、いよいよ山登りと勇んでバスを降りたが、三千メートルを越す乗鞍本山に挑戦するのはいかにも無謀、手頃な魔王岳2764メートルに登ることとなった。

2764メートルという大変な高さで、さすが土佐高ハイクの会ということになるが、実は畳平が2720メートル程なので、自分の足で登ったのは僅か40メートル程であった。

それでも霧が流れ、雲海の中に入ったかと思うとまた晴れて、「登山」に来たのだという清々しい気持ちになれ、メンバーの表情も「来てよかつ



魔王岳集合写真



円空庵

パノラマはまさに今回のハイ  
ライト、昨日登った乗鞍から  
西穂高、槍が岳、笠が岳など  
など、雲海に隠れつつ出でつ  
の神秘的な山の佇まいに感動し  
たひと時であった。

これだ目的の登山(?)は  
終え、次に目指すは飛騨高山  
高山の古き町並みへとバスは  
快適に進む。

幹事部屋或いは深夜の廊下で  
の38回生数人の深酒はいつも  
のように続き、翌朝、別棟に  
泊まっていたバスガイド嬢工  
藤さんから、「皆さんお元氣  
ですねー」との驚きの言葉を  
頂いた。

さて、明けて十六日、心配  
された天気の方はまずまず大  
丈夫の模様、二人の晴れ女に  
感謝しつつの出発となる。

目的地はまず新穂高しらか  
ば平駅、標高1308メート  
ルである。ここからロープウエ  
イで標高2156メートルの  
西穂高口駅まで登る。約八百  
メートルを僅か7分で登るそ  
のスピードには本当に驚き!  
その間の見晴らしの良さは  
筆舌に尽くし難い素晴らしい  
ものであるが、それにも増し  
て西穂高口駅での360度の



新穂高第2ロープウェイ

ら、同君作成の舟伏窯の皿、  
茶碗など一点数万円の焼き物  
が五点、賞品として提供して  
頂けることとなり、俳句など  
作ったこともない面々がいつ  
しか五七五に没頭していく奇  
妙な空気が流れ始めた。

最後の観光地、白骨温泉に  
着くまでに一人句(無記名)  
投句をして頂き初参加の小生  
が僭越にも選句をさせて頂く  
段取りであったが、集まった  
55句を見て正直土佐高の頭  
脳レベルの高さ、感性の豊か  
さに驚いた。

突然の俳句会なので作るこ  
とが第一、季語などなくても  
感性の良さがでていれば十分  
という気楽な俳句会というイ  
メージでいたが、なんとなん  
と小生よりもうまい俳句が目  
白押し、選者は嬉しい悲鳴を  
あげてしまった。

小生の独断と偏見による選  
句結果は次のとおり

特選

天(二位)  
飛騨の里車窓に踊る秋桜

金澤由里

地(二位)

霧流れ白き穂高の影を見る

伊藤真紀子

人(三位)

コスモスに心残せし奥飛騨路

久保正男

四位

稜線を秋風に乘る夢散歩

羽方将之

五位

雲晴れて秋に輝く飛騨の山

窪田秀忠

秀作

湯の里の地蔵の脇に花檜

濱田継夫

こまくさを優しく守る巨大岩  
橋田恵美子



運転手庄司さんとガイドの工藤さん、昨年と同じ

青空に白樺の木々澄みわたる  
安部洋男  
酒肴クーラー快適バス旅行  
岡田四郎  
新穂高円空庵に初紅葉  
永野 浩

選外句の中には詠み上げる  
と爆笑を誘う句も幾つかあつ  
たが、初めてにも拘わらずな  
んとか季語を入れねばという  
熱意が実を結んで本人もビツ  
クリするような佳句が沢山で  
きて思いがけず楽しい句会に  
なったように思う。

さて、順調に行程をこなし  
た旅であったが、やはり一筋  
縄ではいかなないのが「土佐高  
ハイクの会」、女王卑弥呼め  
く二人の晴れ女のお陰で天候  
さえも意のままにしたが、最  
後に大渋滞という難関が待ち  
受けていた。予定通り白骨温  
泉を出たにも拘わらず、八王  
子のインターを抜けたのが十  
一時、新宿に着いたのが十七  
日午前零時五十分、バスのド  
ライバーもガイドもクタクタ  
になっていた。

それでも「土佐ハイクの会」  
は続く。次回は馬田宏さん  
(37回)に幹事長をお願いす  
ることに決し、来年の再会を  
固く約して散会した。

# 岡崎のおんちゃんのおい出話(四)

23 回生 岡崎昌生



はりまや橋から東へ百米ばかり東種崎町（現在の町名はない）の電車道で小さな店屋をやっていた祖父父母の家で生まれ、育てられた。

父は婿養子で、近所に間借りして母と住んでいた。県庁勤めで、農業関係の仕事、出張も多く忙しかったようだが、若く元気だったので休日にはテニス、魚釣り、徹夜マーじゃんなど、家でのおんぴりといった姿をみたことはあまりない。遊びすぎが原因か、私が小学三年の夏、急性結核で此の世を去った。

【幼稚園】  
菜田場から北へ五十米ばかり入った横町の通称「田淵の幼稚園」に通った。ここは幕末の志士武市半平太の邸跡であった。あまり広くはなかったが、二人の優しいお姉さん先生のお話や歌を聞いたり、スベリ台、砂場で騒いだり楽しい一年であったと思う。

## 子供のころのこと

【小学校】  
昭和十一年（一九三六）四月、高知市立第一尋常小学校に入った。校門のそばに樹齢五百年という大きな楠があり、新しい制服を着せてもらった。私は嬉々として歩いていった。学校の北側には、高知市民の台所を賄う大きな魚市場（現在は弘化台に移転）があり、その威勢のよいセリの声を聞きながら通学した。南側はすぐ鏡川の堤で、雑喉場九反田の橋で潮江に通じていた。

「さいた さいた さくらがさいた」に始まり、読み書き、そろばんを習った。白紙の頭にはすべて新鮮で面白かった。二年、三年となり、修身が加わった。人と人、人と家族、人と社会、国とのつながり、いかにすべきかの教えは今でも心に残っている。

休みや放課後の行動範囲も次第に広くなり潮江の田んぼ、棒堤の雑木林（旧海南学校跡で、九反田の東）、これらは今は家ばかりで昔日の面影もない。そして鏡川と遊ぶ場所に恵まれ、水泳、魚釣り、セ

ミ捕りなど季節に応じて楽しんだ。ある日、田んぼで食用蛙を捕え、二匹を縄でぶら下げ帰っていると橋の途中で知らないオジサンが蛙を欲しいという。ええよといつて渡すと三十八銭呉れた。そのおカネで友達二人で魚捕りの網を買った。その夜、家での話をすると、子供が外で獲物を売ったり、おカネをもらったりするものではないときびしく叱られた。

昭和十二年七月、盧溝橋で起こった戦火は次第に拡大、高知の街でも出征兵士を送る歓呼の声を聞く回数も多くなった。

五年になった時、若い元氣な先生が担任となられた。この先生から教わったことで、後日大いに役立つことなど三つばかり。

①日記をつける習慣がついたこと。当初は戦時教育の一環か、「時局帖」と称して、日々の新聞記事やラジオ放送で国の方針や戦争についてのことを一つでも書くようにとのこと。

②天山路、天山路。地理歴史の時間の中で、欧亜通商、

交通の要衝として詳しく話していた。十年後、大学の入学試験で、「西域」について六百字以内という問題の解答を考えるのに非常に役立つた。

③水一びん十銭。先生が大方の耶馬溪に登った時、山頂の水の値段、水はタダというものになれているものには驚きであった。後日、アフリカの高原で暮らすこととなり、日々飲み水を買うたびに先生の話を思い出した。

昭和十六年四月、小学校は「国民学校」と改称された。その年の暮、日米戦争が始まり、翌年三月、国民学校を卒業した。

なつかしの小学校校舎は二十年の空襲で焼失し、再建されることなく、校区は第二小学校（現・新堀小学校）に吸収された。

交通の要衝として詳しく話していた。十年後、大学の入学試験で、「西域」について六百字以内という問題の解答を考えるのに非常に役立つた。

③水一びん十銭。先生が大方の耶馬溪に登った時、山頂の水の値段、水はタダというものになれているものには驚きであった。後日、アフリカの高原で暮らすこととなり、日々飲み水を買うたびに先生の話

昭和十六年四月、小学校は「国民学校」と改称された。その年の暮、日米戦争が始まり、翌年三月、国民学校を卒業した。

なつかしの小学校校舎は二十年の空襲で焼失し、再建されることなく、校区は第二小学校（現・新堀小学校）に吸収された。



自宅にて

久しぶりに高知へ帰った。新幹線、本四架橋経由で、約七時間。その昔、準急「南風」で朝八時前出発、高松棧橋から宇野に渡り、急行「瀬戸」で、東京着が翌朝十時、約二十六時間を要した。まさに隔世の感である。

街々のたたずまいは随分変わっているが、梅ヶ辻で土電を降り、潮江のおが家へ向かって歩くと、東前方には五台山が、南は孕港口から鷺尾山、筆山など、北には緑の山々が層をなして四国山脈に連なる。そして、その真ん中を鏡川が悠々と流れる。この光景は昔と変わらず、いつみても心を和ませて呉れる。

私自身、すでに還暦、古希を過ぎ、今年が喜寿を迎えた。恐縮ながら、この機会に、高知での子供のころを綴ってみたい。

昭和五年（一九三〇）二月、

昭和十一年（一九三六）四

# 東京ドームで《同窓会》

のつけから判じ物にお付き  
合いたい。

今年の10月1日現在東証一  
部上場会社が1、743社。

日本野球連盟に加盟するノン  
プロ球団が365チーム。う  
ち企業チームが85チーム。こ  
の中に我らが土佐高同窓であ  
る青木章泰頭取(36回生)の  
四国銀行チームと森郁夫社長  
(41回生)の富士重工チーム  
がその名を連ねている。上場  
企業のトップに就任した本校  
同窓が何名いたかは定かでは  
ないが、この2チームが全国  
大会の公式戦で相まみえる確  
率はいかほどであろうか。

ところが今年8月に行われ  
た第78回都市対抗野球大会に  
奇しくもこの両チームが出場  
したのである。厳しい地方予  
選を勝ち抜き僅か32チームし  
か出場できないこの大会の出  
場権を獲得し、しかもそれぞ  
れ初戦を勝ち抜いて、8月30  
日午前10時、遂にこの両チー  
ムの対戦が東京ドームのひの  
き舞台で実現したのである。

全国大会常連で、昨年の社  
会人野球選手権優勝の実績の  
ある富士重工に対し、出場13

回目にして悲願の都市対抗初  
勝利を挙げたばかりの四国銀  
行が対戦する巡り合わせは、  
しかも両社のトップに同窓生

が就任しているこの時期にこ  
の組み合わせが実現する幸運  
は、まさに野球の神様が土佐  
高同窓会に示した粋な計らい



のように見えた。

試合に先立つ1時間前、後  
輩の富士重工森社長は、四国  
銀行が陣取る三塁側に青木頭  
取を表敬訪問し写真のごとき  
両雄の握手となった。

「どうかお手やわらかに」  
(青木頭取) 「先輩でも遠慮  
はしませんよ」(森社長)

「どうか遠慮してください」  
(青木頭取) 「ほんならスバ  
ルを買ってください」(森社  
長) と和気あいあいの挨拶を  
交わし、しばし握手のままの  
和やかな談笑が続いた。試合

は3・1で富士重工が勝利を  
おさめたが、このシーンは高  
知新聞及び毎日新聞全国版の  
ニュースにもなり、文武両道  
の土佐高校の名を改めて全国  
に印象付けた。

折しも母校では土佐高新時  
代の幕開けを告げる新校舎建  
設の槌音が響き始めたこの時  
期、お二人のエール交換のシー  
ンは、同窓会の記念の一ペー  
ジとして長く記憶に残ること  
となった。

なお森社長より、『新車購  
入計画中の同窓生並びにご家  
族の方におかれましては、是  
非スバル車ご検討をよろしく  
お願いいたします。ご成約に  
あたりまして出来るだけの対



応をさせていただきませう」と  
いう嬉しいお話を頂きました  
ので、スバル車をご検討の際  
には、先ず「筆山編集室」へ  
ご一報ください。

【鶴和千秋(41回生)】



# ガーナ高校生たちと「2007原宿スーパードisco」に参加!!

引率教員 高橋篤美

『ロッセ・ガーナよさこい  
連で踊ってみよう』軽い気持ちで「原宿元氣祭りスーパードisco」に2007に参加する生徒引率の依頼を受け、いざ田村千賀先生のスタジオへ。  
生徒たちと一緒に振り付けを半分くらい覚えたところで、田村先生の一言、「土佐高校って本当にすごい学校ですね。」



大先輩（35回生）からこの子たち（86回生）までつながっていて、支援してくれている。こんな学校、ほかにはないよね。」

JICAで生徒たちとガーナの高校生との交流が深まるにつれ、私は田村先生の言葉を実感することができました。浅井さん、中田さん、中村さんをはじめ、土佐高校OB・OGの方々に生徒たちが支えられているんだな・・・と。  
最初は「うまくコミュニケーションとれないよ」とぼやいていた土佐中学生女子3名も麻布高校、東洋英和の生徒たちと楽しく会話し、次第にガーナの高校生ともうちとけ、笑顔で語らっている。早いものです、若者同士は。

今年の音楽はガーナで人気歌手の作。歌詞は現地の言葉と英語、ガーナのイメージたっぷりの振り付けを力いっぱい踊って、4日間はあつという間に過ぎてしまいました。

本番当日、猛暑のために体調を崩す生徒がでるなど、アシスタントもありましたが支援会の方々にお世話になりました。大事にはいたりませんでした。16年ぶりに踊ったよさこい。今夏の最高の思い出をありがた



とうございました。

86回生 3A 野口紗矢香

今回参加したのは自発的に参加しようと思っていたわけではありませんでした。友人が誘ってくれて参加したのですが、とても充実した5日間になりました。一日に何時間も練習して、とても疲れる日もありました。ガーナ人はさすがタフだなあと感じたりもしました。彼らのリズム感のよさには驚きました。東京メトロ線やJRを使つての移動は社会勉強にもなりました。



高知とは比較にならないほど人が多いことや、歩く速さの違いにも驚かされました。

本番当日、表参道でスタンバイしているとき、笑顔とほうらはらに内心ドキドキで出でてきて、お客さんも笑顔を出してくれました。私は表参道を踊つたあと、具合が悪くなってしまい、そのせいで周りの人に迷惑もかけたし、1回しか踊れなかったけど、とても楽しかったです。最高の夏休みでした。本当にありがとうございました。

86回生 3A 松山桃子

私のこの夏の一番のイベントが終わった。ガーナや東京の高校生と交流をしながら、自分の町の祭りを東京ででき

ちやうという高知在住の私にとっては、超プレミアマイイベントであった。

まず、初日は東京の人ごみと地下鉄に圧倒されてとても疲れたが、その夜のガーナ大使館で行われた立食パーティーはとても楽しく、疲労を忘れさせてくれた。

合宿の楽しみは何と言っても、就寝前のおしゃべりである。ガーナの女の子たちとも話した。話して思つたことは、ガーナ人も日本人も考えていることは同じ、つまりは恋話が大好きなのである。私はこのとき、文化の違いは多少あってもやはり人種なんて関係ないという結論に達した。

この合宿に参加して一番良かったことは、何より、友達が増えたことだ。だから、今回は土佐からは3人しか行かなかったが、より多くの人に参加してほしいと思う。





86 回生 3C 近藤真菜  
 ガーナ人と交流したよさこい  
 JICA地球広場によつて来た。ここにはもうガーナ人も来ているし、国際交流の幕開けだ！と期待に胸膨らませた。  
 その日は麻布高校や東洋英和女学院の中高校生とガーナ人の高校生との文化交流だった。麻布の高校生はとも流暢に英語を話していて感心した。私も片言の英語でガーナ

人と話したが、なかなか自分の意思をうまく伝えられなくともどかしい思いをした。  
 二日目、よさこいの練習も大変だったが、ガーナ人との会話も大変だった。なぜなら、ガーナ人独特の英語はほとんど聞き取れず、何度聞き返しても理解できなかつたからだ。次第に会話するのが嫌になつてきて、少しホームシックになつてしまった。けれど、ガーナ人の女の子が宿泊している部屋に来てくれたり、一緒によさこいの練習をしているうちにだんだん会話が楽しくなつていき、最終日が来ると、まだ帰りたくないと思うようになつていた。  
 今回のガーナ人との交流を通じて、英語で自分の意思を伝えることが少しでも鍛えられたと思う。



季節のふるさとの味  
**土佐酒蔵**

銀座7-12-4 友野本社ビルB1  
 電3545-3855 銀座第一ホテル通り

お悔やみ申し上げます

14回	大谷泰象	H 19
15回	斎藤和夫	H 18
21回	堀 昭吉	H 18
28回	永吉祥太郎	H 18
29回	廣瀬俊彦	H 18
32回	谷中敬功	H 19
33回	滝口隆義	H 11
47回	宇都宮秀哉	H 12
56回	山本雅彦	H 23

はちきん会のお知らせ

次回はちきん会は、  
 2008年4月19日  
 (土) 12時より  
 「ザ・リッツ・カールトン・東京」(東京ミッドタウン内)にて行います。  
 どなたでもご出席歓迎いたします。ご予約ください。  
 詳細は後ほどお知らせいたします。

東京ミッドタウン  
 赤坂から六本木へと続く東京の新しい文化・ビジネスの拠点。  
 東京の中心に位置する抜群のロケーションに4ヘクタールものゆたかな緑地、コンベンションホール、美術館、レストラン&ショップ、レジデンスそしてザ・リッツ・カールトン東京(2007年3月30日開業)が集まる、高度総合都市。

**[母校及び同窓会本部・各支部一覧表]**

土佐中学・高等学校 事務局 千頭裕 〒780-8014 高知市塩屋崎町1-1-10  
 (TEL) 088-833-4394 (FAX) 088-833-7373 (E-mail) tosa@tosa.ed.jp (HP) http://www.tosa.ed.jp/index.html

土佐中学・高等学校同窓会本部 会計幹事 千頭裕 〒780-8014 高知市塩屋崎町1-1-10  
 (TEL) 088-833-4394 (FAX) 088-833-7373 (E-mail) tosa@tosa.ed.jp (HP) http://www.tosaobog.com/

同窓会北海道支部 事務局長 島村昭範 〒004-0074 札幌市厚別区厚別北4条3丁目14-8  
 (TEL) 011-893-3509 (FAX) (E-mail) shima49n@yahoo.co.jp

同窓会香川支部 事務局長 武山正人 (担当: 大石浩) 〒760-8573 高松市丸の内2番5号 四国電力(株)  
 (TEL) 050-8801-2720 (FAX) (E-mail) ooishi11737@yonden.co.jp

同窓会広島支部 事務局長 山崎迪子 〒732-0062 広島市東区牛田早稲田1-24-7-210  
 (TEL) 082-227-2656 (FAX) 082-227-2656 (Email) myamazaki@dion.enjoy.ne.jp  
 (HP) http://www.geocities.jp/hiroshimashibu/

同窓会関西支部 事務局長 原田和人 〒530-6001 大阪市北区天満橋1-8-30 OAPタワー1F アリコジャパン内  
 (TEL) 090-1073-7822 (FAX) (E-mail) harada73@hotmail.com (HP) http://www.tosa-ko.org/kansai/

同窓会東海支部 事務局長 神宮美恵子 〒468-0075 名古屋市中天白区御幸山1201 御幸山パークマンション B-301  
 (TEL) 052-837-5834 (FAX) (E-mail) jjingu-m@crux.ocn.ne.jp  
 (HP) http://tosakotokai.web.infoseek.co.jp/

同窓会関東支部 事務局長 二宮潔 〒100-8222 東京都千代田区丸の内1丁目6番5号丸の内北口ビル  
 森濱田松本法律事務所弁護士市川直介 介付  
 (TEL) 03-5223-7719 (FAX) 03-5223-7619 (E-mail) naosuke.ichikawa@mhmjapan.com

# ★出版レーダー★

鍋島高明(30回生)	「幸徳秋水と小泉三申 叛骨の友情譜」	高知新聞社	1、785円	2007. 9
塩田潮(40回生)	「危機の政權」	東洋経済新報社	1、785円	2007. 10
	「昭和30年代」	平凡社	924円	2007. 07
西村繁男(40回生)	「絵本もうひとつの日本の歴史」(絵)	解放出版社	2、625円	2007. 10
黒鉄ヒロシ(41回生)	「旗本たちの昇進競争」(イラスト)	角川学芸出版	580円	2007. 05
	「龍馬を斬る―誰が龍馬を殺したか」	小池書院	1、500円	2007. 06
高山宏(42回生)	「超人 高山宏のつくりかた」	NTT出版	1、680円	2007. 08
	「近代文化史入門」	講談社	1、050円	2007. 07
宮岡等(49回生)	「精神障害のある救急患者対応マニュアル」(監修)	医学書院	3、990円	2007. 08
	「強迫性障害の研究」(編集)	星和書店	2、940円	2007. 06
坂東眞砂子(51回生)	「春話二十六夜 月待ちの恋」	新潮社	620円	2007. 08
	「春話二十六夜 岐かれ路」	新潮社	620円	2007. 08
	「花の埋葬」	集英社	450円	2007. 07
	「バラインの寺」	文藝春秋	1、650円	2007. 06
英保未来(54回生) (P・N大森望)	「スロー・ブロード・イアン・ワトソン傑作集」(訳)	早川書房	903円	2007. 06
森岡浩(55回生)	「難読・稀少名字大事典」	東京堂出版	7、140円	2007. 05
廣瀬裕子(59回生) (P・N高遠裕十)	「経営知能」(訳)	光文社	1、890円	2007. 08

「」からは雑誌に掲載されています

公文俊平(28回生)	「情報社会研究―成熟する「近代」をどうとらえるか」	智場	109	6-21	2007
	「情報社会学からの管見」	日本社会情報学会学芸誌	19(1)	5-14	2007
竹内靖雄(29回生)	「企業は「小人」で結構。「聖人君子たれ」は善メッキにすぎない」	石垣	27(3)	26-28	2007
島内英佑(30回生)	「ペンギンに会いたくて南極へ―アルゼンチンのブエノスアイレスとウシュアリアを経る」	道路建設	701	1-8	2007
田島征三(34回生)	「鼎談時代を超える発想―『ひげのあるおやじたち』から『ひげがあろうがなろうが』」	部落解放	581	98-115	2007
尾池和夫(34回生)	「中期目標の達成度評価―国立大学法人の立場から」	IDF	490	51-54	2007
大橋一章(36回生)	「クソノキ像の制作をめぐる」	奈良美術研究	5	85-87	2007
野田正彰(37回生)	「虜囚の記憶を贈る(第2回)中原からさらわれた少年(承前)」	世界	769	198-209	2007
	「虜囚の記憶を贈る(新連載・第1回)中原からさらわれた少年」	世界	768	211-222	2007
	「光市母子殺害少年「父」の暴行、求められた母子相談」	週刊ポスト	39(36)	34-39	2007
塩田潮(40回生)	「FOCUS政治 政権奪取は可能か、試される小沢代表」	週刊東洋経済	6097	128-129	2007
	「FOCUS政治 敗退時の退き際、粘り腰か恬淡か」	週刊東洋経済	6091	106-107	2007
	「FOCUS政治 小手先の策では限界、逆風下の参院選」	週刊東洋経済	6086	136-137	2007
	「FOCUS政治 党内で広がる失望感、政策論で勝負せよ」	週刊東洋経済	6080	92-93	2007
	「FOCUS政治 国民投票法案なぜ急ぐ安倍首相、戦略欠如で自滅も」	週刊東洋経済	6073	196-197	2007
	「FOCUS政治 党内の人心掌握術、「岸」や「佐藤」は怎么处理したか」	週刊東洋経済	6067	120-121	2007
	「FOCUS政治 短期決戦に方針変換?安倍首相の新戦略」	週刊東洋経済	6060	108-109	2007

	「民主党白書―野党第一党の夢と壁(最終回)7合目からの挑戦」	野党第一党の夢と壁(最終回)7合目からの挑戦	147	150-157	2007
	「民主党白書―野党第一党の夢と壁(4)最終戦争のゴング」	野党第一党の夢と壁(4)最終戦争のゴング	146	156-163	2007
	「民主党白書―野党第一党の夢と壁(3)瀬戸際の戦術」	野党第一党の夢と壁(3)瀬戸際の戦術	145	100-107	2007
	「戦後憲法政争史(第7回)熱を帯びる「吉・鳩戦争」憲法改正と再軍備で吉田打倒に挑む鳩山一郎」	野党第一党の夢と壁(3)瀬戸際の戦術	145	100-107	2007
	「戦後憲法政争史(第6回)憲法の自衛権を巡り隠された「安保条約」の真実を追及した吉田均」	野党第一党の夢と壁(3)瀬戸際の戦術	145	100-107	2007
	「戦後憲法政争史(第5回)吉田均と吉田茂の対立戦後初の大政争劇は「第九条」で始まった」	野党第一党の夢と壁(3)瀬戸際の戦術	145	100-107	2007
	「この人に聞く有権者が責任を持たない選挙は衆愚政治になる「分権」と「自治改革」はマニフェストで進む」	野党第一党の夢と壁(3)瀬戸際の戦術	145	100-107	2007
	「戦後憲法政争史(第4回)「天皇制」と「戦争放棄」で政府とマッカーサーはどう折り合いをつけたか」	野党第一党の夢と壁(3)瀬戸際の戦術	145	100-107	2007
	「戦後憲法政争史(第3回)権力闘争や階級闘争の影響を強く受けた戦後政治の憲法論議」	野党第一党の夢と壁(3)瀬戸際の戦術	145	100-107	2007
宮岡等(49回生)	「チーム医療によるコンサルテーション・リエンジ精神医療―リエゾンナースの役割」	臨床精神医学	36(6)	715-719	2007
英保未来(54回生) (P・N大森望)	「晩夏に贈る世にも美しいベスト本」	週刊朝日	112(45)	38-42	2007
	「大森望の56観光局(第8回)SE編集者列伝その(1)」	大森望の56観光局(第8回)SE編集者列伝その(1)	48(8)	100-103	2007
	「円城塔インタビュー『Self-Reference ENGINE』―驚異の新人、(リ)の登場」	大森望の56観光局(第7回)イベントの地平線	48(7)	6-7, 88-91	2007
	「大森望の56観光局(第7回)イベントの地平線」	大森望の56観光局(第7回)イベントの地平線	48(7)	100-103	2007
	「大森望の56観光局(第6回)「100」話をくぐった人、の栄光と悲愴」	大森望の56観光局(第6回)「100」話をくぐった人、の栄光と悲愴	48(6)	206-209	2007
	「大森望の56観光局(第5回)日本SFの文学賞」	大森望の56観光局(第5回)日本SFの文学賞	48(5)	94-97	2007
	「大森望の56観光局(第4回)ミステリ史の中のSF史」	大森望の56観光局(第4回)ミステリ史の中のSF史	48(4)	158-161	2007